

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

インドネシア バンドン日本人学校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦勞した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題
- ⑧ おわりに

①学校の規模や子どもたちの実態

- 本校は今年度のスタート時、小学部6名、中学部6名、それに幼稚園児2名の小規模な日本人学校である。
- 派遣教員以外の保護者はバンドン市や周辺の日系企業に勤務している。
- 今後のコロナの広がりによっては何とも言えないが、現在までのところ、コロナの関係で一時帰国または本帰国した子供はいない。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- 3月2日、首都ジャカルタ近くのデポック市においてインドネシアで最初の新型コロナウイルス感染者が発見された。
- 当初、このインドネシアで初めて発見された患者に、他国在住の日本人の方が関係しているとの発表もあり、一時、日本人に対する嫌がらせ等もあったと聞かすが、バンドン市で生活していて、スーパーマーケットでも銀行でも移民局でも日本人に対する嫌がらせ等は全くなかった。いつも通りのフレンドリーな住民の姿がそこにあった。
- インドネシアは国全体でのコロナ対策もあるが、州政府による規制や対策が取られることが多く、他都市への移動制限、学校の休校、モールの閉鎖、工場等以外の職場はテレワークとし出勤しない、乗用車の利用時は定員の半数以下でマスク着用、外出時はマスクの着用などの大規模社会制限は州政府ごとに運用されることが多い。
- 休校措置や教員の出勤禁止やオンライン授業の実施なども地方の教育局から発出され、変更や延期もあるので、確かな情報をキャッチすることが難しい。
- イスラムの断食が終わり、断食明けの休暇（レバラン休暇）の真ただ中の現在、バンドン市の大規模社会制限は少なくとも5月29日までは延長されている。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- 3月2日にインドネシアで最初の新型コロナウイルス感染者が発見されて間もない3月13日に卒業式と卒園式、修了式を実施した。
参加者はバンドン在住者に限り、三密を避け、時間を短縮する対策を講じた。
- その後、インドネシアの教育文化省バンドン支局から現地校に児童生徒、教員が登校することの禁止通達等があり、本校も学校での行事や授業が行えなくなった。

④ 実際の取り組み

- 4月13日、Web上で入学・入園・始業式を実施し、翌14日より校長も含めた教員全員によるオンライン授業を開始した。
- 最初は朝の会、小学部4教科、中学部5教科の実施であったが、現在は芸体教科や、学級活動、児童生徒会・委員会活動等もLineのグループチャットを使って実施している。
- 登校できなくとも、バンドン日本人学校に所属しているということを少しでも感じながら生活してほしいとの先生方の思いもあり、
 - － 子供たちや先生方一人一人の夢と、写真を送ってもらい、校内に上げた鯉のぼりと共に編集し配信したこいのぼり集会や、
 - － 児童生徒会役員の任命証書を子供一人一人が校長から受け取る目線で撮影した動画を配信するなどして、できるだけ学校にいるときと変わらないような工夫もしている。
- 今年度派遣予定の教員は3名（現職2名、シニア1名）であるが、現在日本で待機中のため、日本からオンライン授業に参加している。児童生徒と直接の面識がない中でのオンライン授業となっており、すぐにでも本校への着任が望まれる。
- また、本校の運営を支えているローカルスタッフの事務職員、運転手兼用務員、幼稚園の教員へのコロナ対応の研修も実施した。

⑤ 苦労した（している）こと

- オンライン授業を行うにあたり、春休み中から日本とつないで実践的なオンライン授業の研修を行ったが、この段階で、ネット回線スピードが遅いことがわかった。
- テレビ通話はもちろん、音声だけの通話もスムーズに行われず、回線スピードがネックになることが判明した。
- また、双方向のオンライン授業を行うためにはどのアプリを使うかも問題となった。
- 低学年の児童でも扱え、子供たちの反応を確かめながら授業展開のできる双方向の通信アプリを使うこととした。
- また、子供たちが一人1台、通信端末を持っているわけではないので、自宅にある通信端末の種類や数の調査を3学期のうちに言い、兄弟が重ならないような時間割も工夫している。
- 音声会話をしていて、途中で会話が途切れたり、あらかじめ準備した動画が子供たちに届くまでに時間がかかったりということも頻繁に起こるため、教師側は、「ビデオ通話ができる場合」「音声通話ができる場合」「文字だけのチャットの場合」など、いろいろな状況を想定した授業準備をしている。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- Web上ではあったものの、当初予定していた日に入学・入園・始業式を実施することができ、子供たちが無事に進級したうえで、翌日からオンラインによる授業を新しい学年の教科書をもとに実施できたのは、先生方が「すべては子供たちのために」というスローガンのもと、同じ方向を向いて準備し、保護者の協力があったからだと思う。
- オンラインによる授業は教員にとっても準備や授業中の臨機応変な対応など、通常とは全く違う労力を費やすが、それに一生懸命応えてくれる子供たちの頑張りが伝わってきている。
- いつか、この子供たちと教室で素敵な授業を作っていくことを夢見て、先生方も子供たちも頑張っている。

⑦ 今後への課題

- 今後いつまでオンライン授業を続けなければならないのか、子供たちが通学できるようになった場合でも、三密を避けること、マスクの着用、手洗いや消毒、検温などを十分に意識した学校生活を準備しなければならない。
- また、日本で待機している派遣教員が着任するまでは、彼らによるオンライン授業も併用しながら、授業を展開していく予定であるため、日本人学校のネット回線速度の改善を図ることが必要である。

⑧ おわりに

- 日本人学校や補習授業校、日本の学校だけでなく、世界中の学校がこの新型コロナウイルスに対峙しながら、目の前の子供たちを何とかしようと、手探りで模索している。
- それは、発展途上の国の、それも中央ではなく、その日その日の生活に必死な地域の学校で、先生方が教えていることに通じることなのかもしれない。
- 私たちが長い時間かけて積み上げてきた教育内容や教育方法の本質的なことが、今、問われているのかもしれない。
- あの、福沢諭吉は教育の目的は、「天下泰平・家内安全」と言い切った。
- 今こそ、世界の国と手を取り合って、人類の幸せのために何ができるか考える良い機会でもある。
- さて、今年、隣の地元の学校とどんな交流ができるだろうか。国際交流の真価が問われているように思えてならない。